聴覚障がい教育支援情報紙
みみネット
No320　令和４年５月11日
発行：大阪府立中央聴覚支援学校
聴覚支援センター

-Index-

映画「ヒゲの校長」インタビュー＜第２弾＞前編
チャレンジ！発音指導⑩
みみよりコラム

映画「ヒゲの校長」インタビュー＜第２弾＞前編

大阪ろう就労支援センター理事長

前田浩先生に、ききました！

みみネット No.318 では、映画の公開に先立ち、NHK 手話ニュースキャスターとしてご活躍されている､那須英彰さんへのインタビュー記事を掲載しました。今号では、長きにわたり本校中学部で教壇に立たれ､現在は大阪ろう就労支援センター理事長としてご活躍されている､前田浩先生への独占インタビュー記事を掲載します。

前田先生は、本校（元私立大阪盲唖院）の卒業生であり、また本校最初の聴覚障がい教員となったことでも知られている､福島彦次郎先生の役を演じられました。

福島彦次郎先生の役を演じるにあたり､役作りで特に意識されたことはありますか？

映画の内容が大正～昭和戦前の実話であり､そこで使われる手話も今の手話とはちがう部分があるため、できるだけ当時の手話表現を考えながら撮影を進めました。例として、「学校」の手話も今は左手で「屋根」を、右手で「教える」を表しますが、その頃は「屋根」+「学ぶ」+「庭」で表していたようです。映画の中で当時の表現を意識しながら手話を使うにしても、（これでいいだろうか）と迷いながら演じたこともままありました。

また、昭和初期の髪型を考えたり、衣装選定も古いタイプのスーツがなかなかなくて、グレーのくたびれたスーツを着たりしていました。何より困ったのは、私自身の年齢です。昭和初期の福島先生は､高橋先生と同じく青年期でしたので若かりし福島先生を演じるのはなかなか難しかったです。

福島彦次郎先生の人物像や魅力について教えていただけますか？

私立大阪盲唖院開校以来の秀才の誉れ高く、文筆をよくされた人です。本校卒業生にして、初のろう者教員でおられました。1913 年に教員として本校に赴任しましたが、その翌年に、宮城から高橋潔先生が赴任されました。

手話もろう者との関わりも全く初めての高橋に、手話やきこえない子どもたちのこと、言葉を授けることの重みを伝えていったのです。福島先生あっての高橋先生であったとも言えます。高橋は、福島彦次郎先生、藤本敏文先生たちろう者教員から学びながら、手話と日本語を学び使うメソッドとしての併用法を志向されました。

福島先生は、藤本先生のように表舞台に出て活躍するタイプではなく、自分の強み、持ち場を大切にされてきた方であり、彼の矜持と謙虚さに魅力を感じます。

「言語や文化が違う人たちが共に共存できる社会｣につなげたいという思いが込められた映画だと伺っています。それは、どのような社会でしょうか？

旧聞に属しますが、1979 年の国際障害者年行動計画において次のフレーズが謳われていた時期があり、感銘を受けました。

**「ある社会がその構成員のいくらかの人々を閉めだすのであれば、
それは弱くもろい社会である。」**

それはノーマライゼーション概念の流れから出されたフレーズですが、今日の「diversity 多様性」理念と表裏一体をなすものです。人はみんな楽しく過ごしたい、わかりあえる友をもち、何かの集まりやグループに関わりながら自分の居場所を見いだしたいと願って生きています。そこで、それぞれのキャリアも生活環境も同じでなければ、当然、言語や文化、価値観、生活様式もさまざまです。共に快適に生活するには、自己と違うさまざまな属性を互いに受け入れ合う姿勢が前提になるし、他者の思いに対する想像力の豊かさが問われます。こうした想像力が他者への優しさの根源になるだろうし、学力だけでなく、想像力を育む土壌を築いていくことが学校教育の中でもっと重視されるべきです。

身近な人が、何を喜び、何に悲しみ、何を求めて生きているかをおもんばかれる力を育てることが「共に生きる」コミュニティの形成につながっていくのであって、そのような感性、イマジネーションの力をどう育てていくかが問われています。

映画の舞台である大阪市立聾学校（幼稚部～小学部）にて学ばれた 8 年間、教壇に立ち続けた 36 年間、その中で強く印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

いろんなエピソードがありますが、その中の一つを紹介します。あるメーカーに就職した卒業生が文化祭で来校された時に聞かされた話です。教え子だった彼は入社してまもない６月に学校に来られたのですが、次の相談を受けました。

５月中旬に会社の歓送迎会があり、集合時間が６時半だという。６時前には一番乗りでお店に入り、誰もいない会場の部屋に入って後からやってくる社員たちが座りやすいように１番奥で座って待つことにした。それが、ぞろぞろと社員がやってきては、怪訝な顔で自分を見る。６時半には課長、部長も来られ、その二人が自分の前で咎めるような感じで何かを言っている。何事かわからず困っていると、同僚社員があわてて来て、自分の手を引っ張って入口近くの席まで移動させられたと。なぜそういう仕打ちを受けたのか納得できなかった。翌日、同じ課の先輩から部屋の奥は上座と言って、年配者や立場のある人が座るのが常識だと聞かされ、やっと昨日の意味がわかったと。今まで学校でも家庭でも上座のことを聞かされたことがなくて、だから皆の前で恥をかかされた。上座下座のこと、なぜ教えてくれなかったですか。学校って何のためにあるのですか！

こうした話を見聞する中で、いつか学校を退職したら、ろう者たちが就職するまでにコミュニケーション・スキル、ビジネスマナー等を身につけていくための過渡的なセンターを立ち上げようという思いが、私の中で渦巻くようになりました。それが大阪ろう就労支援センターの原点であると言っても過言ではありません。

インタビューでは、映画にまつわる話のほかにも、聴覚障がい教育についての今日的課題、今後の在り方についてなど、多くのお話を伺うことができました。前田先生のインタビュー記事については、特集記事として５・６月号連続で掲載します。なお、次号では「ヒゲの校長」の見どころや、聴覚障がいのある子どもたちを担当されている先生方への熱いメッセージについても掲載する予定です。聴覚障がい教育に携わる先生方に必見の内容となっています。乞うご期待ください！

チャレンジ！発音指導 ⑩

ア音

今号では、ア音の発音指導について、ご紹介します。

「あ」は自然な構え方で口をあけて声を出せばよく、口は、歯と歯のあいだに親指をはさんだぐらいあけさせます。舌は平らで力を入れすぎないようにし、舌先が軽く下歯裏にふれる程度にさせます。口の開きが狭すぎると「え」に近い音となってしまいます。具体的には、あくびの真似をさせて「あー」と誘導したり、胸に手をあててひびきを感じさせながら発声させたりすることで誘導します。

「あ」を「お」に誤る場合

口の開きが不十分、または、舌が高く上がってしまっているため、口を開かせるか、舌を下げさせると改善します。

「あ」を「え」と誤る場合

口の開きが不十分な上に、口唇を引いてしまっているため、しっかりと鏡で口形を見せながら「あ」と「え」の出し分けを区別して練習させます。

鼻音化する場合

奥舌が高くなって、本来口からだす息を鼻へ通してしまっているため、口を開いたまま声を口から出したり、鼻から出したりする練習を積み重ねる必要があります。

みみより★コラム

2022 年 5 月 1 日（日）から 15 日（日）にかけて、ブラジル・カシアスドスルで第 24 回夏季デフリンピック競技大会が開催されています！デフリンピックは、オリンピックやパラリンピックと同様に、４年に１度、世界規模で行われている聴覚障がい者のための総合スポーツ協議大会です。今回は、選手 95 人を含む計 149 人の選手団が派遣されています。

（参考）日本選手団ウェブサイト　https://www.jfd.or.jp/sc/brazil2021/

「みみネット」編集部：
大阪府立中央聴覚支援学校　　聴覚支援センター　　担当：中咲、金森
〒540-0005　大阪市中央区上町１-19-31
TEL. 06-6761-1419　FAX. 06-6762-1800